四国農学連報

第30号

発行者
四国地区農業大学校
学生連盟
編集
徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校 学生自治会

学生生活の思い出

四国地区農業大学校学生連盟会長
徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校学生自治会長
長尾　翔

私は、中学生の頃から農業に興味があり農業高校に進学しました。高校には人工光型植物工場があり、LED照明を使用してリーフレタスを栽培していました。また、加工品開発や、簿記など商業分野についても学習し、六次産業について学ぶことができました。卒業後の進路を決めるにあたって、さらに農業について深く学ぶだけではなく、実践的な学習ができる徳島農大に魅力を感じたため進学をしました。

いざ、入学してみると大変な実習が多く、高校生活では室内の作業が多かったため、屋外での作業は体力を奪われました。慣れない作業も多く、実習時間を超えてしまうことや、時間ギリギリまで作業をすることもありました。しかし、実習を重ねるたびに作業のスピードが上がり、時間内に作業を終えることができるようになりました。できなかったことができるようになり、とても嬉しかったです。その結果、今までよりも他の学生を気にかけ協力して実習を行えるようになりました。

私自身、農業技術を少しずつではありますが習得することができています。しかし、作物を栽培するという事は容易ではありませんでした。天候に左右され、病害虫の防除が遅れると、大きな被害になり、取り返しがつかなくなります。また、雑草はあっという間に草丈が大きくなり、気づいた時には生い茂っています。これが一番しんどかったです。

農作業がいかに大変で苦しいのかを身をもって体験しました。しかし、私は農業を嫌いになるわけもなく、逆にそこが農業の魅力だと思いました。一生懸命に手間暇かけ、愛情込めて作ればそれ相応の良いものができる。私はそう考えます。

二学年になり、徳島農大学生自治会の会長に選出して頂きました。同時に四国農業大学校学生連盟の会長を務めることになりました。

昨年は徳島農大学生自治会の副会長として、農大祭でイベントを開催しました。今年は昨年の反省を生かし、昨年以上に農大祭を盛り上げるだけでなく、四国地区の農大の代表として、スポーツ大会を主催県として盛り上げていきたいと思いました。

そして十月四日、スポーツ大会の日が来ました。天候に恵まれ無事開催することができました。一人一人が一生懸命に試合に臨まれている姿に大変感動し、私も皆さんに負けないように頑張りました。私は野球に出場し、惜しくも決勝で敗れてしまいました。しかし、チーム一丸となって戦った良い思い出となっています。

十一月十一日、十二日には農大祭があり、たくさんのお客様に足を運んでいただきました。昨年は一日だけの開催でしたが、今年は二日間の開催で先生方、学生共にこの日を楽しみにしていたことでしょう。野菜や果物、花苗はもちろん、試行錯誤して作った加工品がテントに並び多賑わいでした。野菜や果物の詰め放題や、焼き芋、農大○×クイズなどのイベントを開催し、盛り上げることができました。来年は今年以上に盛り上がることを願っています。

四国の農大で一人だけ、徳島農大で一人だけという貴重な体験ができたことは一生の思い出です。大変なことや、辛いこともありましたが、学ぶことも多く楽しいこともありました。頑張ったからこそ、やり切った感、達成感を強く感じることができました。二年間、先生方、徳島県だけでなく四国の農大の学生の皆さんお世話になりました。ありがとうございました。

今後の進路は、農業法人に就職します。栽培作物はお米です。会社との関わりだけでなく、地域の人と交流し地域全体を農業で盛り上げることができる人材になりたいです。

スポーツ大会　表彰式

四国農学連の活動に寄せて

徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校　校長　朝倉美佐

四国四県の農業大学校学生自治会で構成されます「四国地区農業大学校学生連盟（以下、四学連）」主要行事であります「スポーツ大会」や「意見発表会」が無事盛大に開催されましたことをお慶び申し上げます。あわせて、開催に向けて準備や運営に多大なる御協力を賜りました各校の学生や指導教員の皆さまをはじめ、関係者の方々に対しまして開催県を代表して心より御礼申し上げます。

長期化したコロナ禍の影響により、オンラインやオンデマンドなど、様々な大会や会議がリモートでの開催が当たり前になりつつある中、関係者の皆さまの御努力により、四学連行事も昨年度から少しずつリアルでの開催ができるようになってきたと聞いております。四学連は自治会の交流を通して、自立の精神と相互の資質向上を図ることを目的としており、一堂に会しての開催があってはじめて目的達成に対して大きく効果が発揮されるものと思われます。相反しますが、インターネット環境が充実した現代においては、移動距離・時間を省略できるオンラインの良さも十分認識されているところであり、今後の活動においては、リアルとオンラインを使い分けるなど、より効率的・効果的な運営についての一考も必要ではないかと思うところです。

さて、私事ではありますが、県の異動の事情により令和五年六月一日に徳島農大校長に着任して以降、四学連行事に参画できましたのは、去る十二月十三日に愛媛県四国中央市にて開催されました「意見発表会」のみです。愛媛農大さんの御協力により、五百人規模の大ホールで行われた発表会において、壇上から精一杯自らの将来の農業経営や農業に対する考え、思いなどを発表する各校代表の学生の皆さんを目の前にして、大きな感動を得ることができました。あわせて、早朝に徳島農大を出発し、会場準備や運営にあたる本校学生たちに頼もしさを感じた次第です。

意見発表の中に、農業に関心を持ってもらうため、全国の農大が連携し、インターネットを活用して「農大」そのものをピーアールしていこうという内容がありました。「今農業を支えようとしている私たちこそ、農業という職そのものを深く知ってもらうことを軽視せず、むしろ注意深く力を注ぐべきなのではないでしょうか。」というものです。まずは四学連が連携し、協働の力で農大のピーアールを実現してもらいたいものと期待してやみません。

少子高齢化が叫ばれて久しい現代ですが、あらゆる年代、あらゆる業界で担い手不足が深刻化しています。先日、農大ハウスの修繕を業者委託したのですが、担当職員から「ビニールの張替ができる技術者が不足している、後継者がいないらしい」と聞かされ、現実に驚かされました。このように、あらゆる業界における担い手不足の中、農業に興味・関心を抱き、農大に進学し、将来は農大で学んだことを活かして農業との関わりを持ちたい、農業を通じて地域の役に立ちたいとの想いをもつ農大生たちは農業界の宝です。前述しました「農大」のピーアールを通じ、是非皆さんの力で「宝」を増やしてほしいのです。

本機関誌の発行に続き、令和六年三月には事務引継会を実施し、次年度事務局の愛媛農大さんにスムーズなバトンタッチができるよう、引き続き努めて参ります。

四学連の今後益々の御発展と関係者の皆さまの御健勝、御多幸を祈念し、記念すべき第三十号の四国農学連報発行に寄せてのご挨拶といたします。

6次産業化で価格決定権を生産者の手に

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
水口　楓

6次産業化は販売価格を生産者自身が決定し、安定した収益を得るための助けになると思います。では、農業の6次産業化には、何が必要でしょうか。私は、「付加価値をつけること」、「生産技術を向上すること」、「地域と連携すること」が重要だと考えています。

まず、「付加価値をつけること」で消費者が商品を手にとる機会を増やすことができると思います。付加価値をつけるためには、農産物加工品の開発やローカルブランドの確立などが考えられます。ローカルブランド化した農産物を利用して、消費者の嗜好や需要に合った商品を開発することで、安定した収益を創出できると思います。

また、「生産技術を向上すること」も6次産業化には必要です。ローカルブランドを確立するためには、高度な生産技術とその地域の強みを生かした農産物を作る必要があります。また、加工品を販売するためには、原料となる農産物の安定生産が不可欠です。

さらに、「地域の人々と連携すること」も必要だと思います。地域の人々

と連携することで地域特有のアイデアを盛り込んだ商品の開発や多様な販売方法の確保につながると考えます。多様な販売方法とは、観光農園や直売所の開設であり、それらを設置し、農園自体を観光スポットと位置づけることで、地元だけでなく、観光客を対象とした楽しい体験をサービスとして提供でき、同時に新鮮な地元の農産物やオリジナルの加工品を販売する機会につなげることができると思います。

一方、取り組む際には、大きく分けて「生産者の課題」と「消費者の購買意欲に関する課題」があると思います。

生産者の課題としては、品質管理や加工・販売に関する技術と知見、資金調達などが挙げられます。そのため、農産物の安全性を担保するための仕組み作り、技術や知識を磨くための支援、財源確保のための施策や融資が必要になると思います。以上のように農業の6次産業化は、農業者の力だけでは難しく、様々な立場の人々が一体となって取り組むものだと思います。

消費者の購買意欲に関する課題としては、購買意欲を高めることが挙げられます。売れる商品を作るには、消費者の嗜好や需要を常に把握する必要があるため、消費者を対象とした調査をするなど消費者と連携して、ニーズを把握し、それを生産ラインに反映させることが大切です。また、近年はモノの価格の変動が大きいこともあり、より低価格で購入できる商品を求める傾向も見られます。そのため、ある程度の価格を支払ってでも購入したいと思わせるような商品の開発やブランドの構築が必要だと思います。以上のように解決すべき課題は多くありますが、私は6次産業化が今後の農業を支える重要なキーワードだと確信しています。

私の家はアスパラガス農家であり、小さい頃から祖父母が行う出荷調整の様子を見てきました。その際、まだ十分に食べられるものでも色や形が悪いから出荷できないことがありました。また、農業大学校でもナスやピーマン等の出荷調整をしているとき、多くの規格外品が廃棄されているように感じます。現在の状況は、「品質が良いものを安く購入出来て当たり前」という考えが影響していると思います。今後、SDGsのような考え方の広がりとともに状況が変化していくという期待はありますが、自分たちで状況を変えることのできる6次産業化の取組が必要だと思います。ローカルブランドとして農産物自体の付加価値を高めるとともに、販売できない商品を加工して有効活用する。そして、できた商品を自分たちで値決めし、価値に見合う価格で販売する。そのような農業を将来実現するためにも、私は香川農大で経験できることを数多く吸収し、自分のものとするとともに「6次産業化で価格決定権を持つ」といった考え方に共鳴（共感）するメンバー探しにもがんばりたいと思っています。

カリフラワー中耕風景

「可能性」を「可能」に！持続可能な農業の未来に向けて

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
宮川諒信

私の夢は持続可能な農業の実現です。この夢を達成するために私はいくつかのことにチャレンジしようと思っています。

私が考える持続可能な農業、それは社会全体の変化に取り残されない農業です。

今、世界ではSDGsに取り組もうという流れがありますが、農業の世界でパッと思いつくような取り組みが見当たりませんでした。

それならば、まず自分でできることから考え、挑戦を始めようと思いました。

一つ目は農産物の販売形態を変えることです。

野菜は、ビニールなどで包装されて販売されることが多いですが、もし、無包装の状態で売ることができれば、プラスチック資材の削減につながると思います。また包装にかける時間が減り、農家や小売店のコストや労働力の低減につながると思います。

また、販売の形態は時代や社会の変化とともに変化しており、二分の一や四分の一に切って販売されたり、袋詰めカット野菜に加工されて販売されるようになりました。

今後、どのような販売形態がニーズに合うのか、また、どのようにすればその変化に取り残されないかをしっかり見極めていく必要があります。

私は、これらの課題に前向きに対応し、持続可能な農産物の新しい販売の形態を作りたいと考えており、この課題について近々香川農大で再開予定の農産物直売所の中で実践したいと考え

キャベツ定植風景

ています。

二つ目は外来種の有効利用です。

今、日本では外来種と呼ばれる生物が問題となっており、農業にも大きな悪影響をもたらしています。しかし、有害といわれる外来種も見方を変えれば有機物やたんぱく質であり、実は資源の宝庫であるとも考えられます。私は、そこに着目し、外来種という資源を農業に有効活用できないかと考えました。

そして、私が考えたのは外来種を使った新しいジャンルの有機肥料作りです。

すでに試験的に、ブラックバスなどの魚をミンチにして肥料にしたり、水草を細かくして土壌改良剤として利用するといったことに取り組んでいますが、私はこの課題を卒業論文のテーマとしてさらに深く探求していきたいと考えています。

その結果がこれからの農業にどんな変化をもたらすのか、どのように活用されていくのか、そんな可能性に挑戦できることにワクワクしています。

農業はまだまだ未知数の可能性を秘めている成長産業だと思います。また、その「可能性」を単なる可能性ではなく「可能」に変えていけるのは私たちが持っている若い力だと思います。

そして、持続可能で可能性の宝庫である農業がもっと活性化し、従事者が増える、そんな未来を実現するのが私の夢です。

私の農業観

香川県立農業大学校
花き園芸コース　一年
多田亜矢

私は、香川県の西部の中山間地域に位置する三豊市財田町に住んでいます。財田町では基盤整備が進み、大型機械を活用した家族経営の方や、多くの人を雇いたくさんの土地を借りて野菜づくりをしている法人経営の方、農業機械を共同購入しコスト低減に努めている営農集団の方々もいます。非常に少ないですが、都会から移住して就農している方もいます。また、地域内の道の駅には大きな産直があり、多くの農家の方が出荷しています。

私の家は、自家栽培十年目のミカン園10aとタケノコ畑が10a、亡くなった祖父から引き継いだ水田20aの小さな兼業農家です。家には、中古のトラクターと知り合いから譲り受けたコンバイン、オークションで落札した中古のバックホーなどがあります。すべて古いものなので直しながら大切に使っています。

父と私は、四年前に稲づくりを始めて分からないことばかりのまだまだ初心者マークです。動画サイトの稲づくり動画などを見ながら勉強中といったところです。農業高校では、産直出荷の面白味を感じ、野菜を専攻していましたが、フラワーアレンジメントの授業の後、もっと花について知りたい、育ててみたいと思い、農業大学校の花き園芸コースに入学しました。

農業大学校の花き園芸コースでは、カーネーション、キク、ヒマワリ、ユリといった切花やポインセチア、ベゴニア、シクラメンなどの鉢花を育てており、講義や実習を通していろいろな花の生理生態や栽培方法を勉強しています。花の演習で、輪ギク、洋ギクを栽培している「ほわいとマム」さんの農場に見学に行った際、経営主さんのキクへの愛情を持った育て方や土へのこだわりなどを知り、私の住んでいる所に近い中山間地域における花き経営の可能性に手ごたえを感じました。

また、高校時代には三豊市と高校の野菜部が合同でスマート農業の検証を行い、気温や湿度、土壌水分などのさまざまなデータを気象観測機で計測しながら栽培に適した条件を調査しました。農業大学校では、農薬散布用ドローンの操作演習や直進アシスト付きトラクターでの耕耘も体験できました。このほか環境制御システムを取り入れたイチゴやミニトマトのハウスもあり新しい農業について経験を積み重ねています。

私の住む地域の小学校跡地には、農業機械メーカーが環境制御システムを取り入れた「学校のイチゴ園」という農園を開設しています。その農園では、誰でも簡単に摘み取れるよう高い位置に植え付ける高設栽培などバリアフリー化の実現もしているそうです。

今後、様々なスマート農業技術が開発され労働力の補完や、植物の生理生態にあわせた複合的な環境制御が実用化され、高品質で安定した生産技術開発が進むものと思います。中山間地域などはこれからさらに働き手が減少すると見込まれている中で、地域における大変有効な切り札となるものと期待しています。

私は、まだどのような農業経営をやりたいかといった将来展望がはっきりと見えていませんが、残りの大学校生活で、環境制御技術やスマート農業技術をより深く学び、微力ではありますが実家のある地元の地域農業をより良い方向に進めて、住み心地の良い所にできるよう考えて行きたいです。

農業の楽しさやりがいを伝えたい

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
鉄村　健

私は農業が大好きです。農業は私たちの食べ物を作る大切な仕事です。しかし、農業には労働力不足や十分とは言えない食料自給率など様々な問題があります。私は未来の農業を発展させるため

に五つのことが必要だと考えています。

一つ目は、農業の担い手確保についてです。現在、農業従事者の多くが六十五歳以上の高齢者で占められています。若い世代の農業従事者を確保するために農業経営の法人化が大いに助けになります。法人化によって、農家の経営が透明化し、経済的な持続可能性が向上します。経営者はより効率的な経営をめざし、努力と工夫によって農地を拡張し、生産量を増やし、雇用の受け皿となって農村を支える事にもつながります。

二つ目は、食料自給率を高めることです。カロリーベースの食料自給率は三十八％だとされています。私は、食料自給率を高めるために、国産食材を積極的に食べて応援することを提案します。また、食生活の改善や食品ロス対策も必要です。買い過ぎを控え、残さず食べることも必要だと思います。

三つ目は、農業のＩＣＴ化です。スマート農業では、ドローンや直進アシスト技術などを活用して、農作業の省力化や労力軽減、農業技術の改新、品質の向上などに役立ちます。私はこれらの技術に興味があり、将来は自分でも使ってみたいと思っています。

ブドウ摘粒風景

四つ目は、農家が農産物を作るだけでなく、６次産業化に取り組むことです。農産物は価格競争や複雑な流通経路などによってスムーズな販売が難しくなるところがあります。農家が直接消費者に販売することで、農産物の魅力や価値をもっと伝えることができるのではないでしょうか。例えば、直売所や道の駅などで販売することや農産物を加工したり、付加価値を付けてブランド化したりすることもできます。これらの工夫は私たちの作った農産物の認知度を高め、消費者に選ばれることにつながります。私も将来は自分の作った農産物を加工したり、ブランド化したりしてみたいと思っています。

五つ目は、農業体験やイベントを通して農業に興味を持ってもらうことです。農大の行事の中で例えるとオープンキャンパスなどを通じて、高校生だけでなく、小・中学生も収穫や植付けなどの作業を体験したらいいと思います。また、高校の文化祭などで私たち農大生が農業体験を伝える機会があってもいいと思います。

私は将来のことについてはまだ決めていませんが、農業の一員になりたいと考えています。私は現在果樹を専攻しており、ブドウや梨、桃などの栽培技術を学んでいます。二年生になると課題研究で一つの品目にしぼり込むことになっていますが、少しずつ何に取り組むかを考えながら作業したいです。また、卒業後のことを考えて農業関連の現場を見学し、農業をする上で大切なことや成功体験などを聞いてみたいと考えています。私はこのような活動を通して農業の楽しさややりがいを伝えていきたいと思っています。

農大でがんばっています

香川県立農業大学校
畜産コース　一年
大谷茅颯

時がたつのは早いもので、香川農大に入学して、もう一年になろうとしています。私が、農業高校時代に畜産への興味が湧き、将来は畜産関係の仕事に就きたいと考えていた頃、香川県内で畜産を更に詳しく勉強したいという希望もあったこともあり、ネット検索をしていると、香川農大のホームページにあった畜産コースの紹介記事が目に留まりました。

そこには、畜産のＨＡＣＣＰやスマート農業に関する講義があること、カリキュラムが実習主体で組まれていること、さらには耕畜連携といったＳＤＧｓに配慮した教育方針が示されていて、まさしく私の希望とベストマッチなものでした。これが決定打となり、香川農大畜産コースへの進学を決めました。

私は、高校時代に養豚部門を専攻していたので、豚以外の畜種に関する知識を習得する機会はあまりなかったのですが、農大に入学してからは、畜産概論や家畜生理・解剖といった基礎的な講義をはじめ、後期からは、乳用牛、肉用牛、養豚、養鶏等畜種別の講義も始まり、畜産全体を理解する機会にも恵まれて、どんどん畜産の知識が広がっていると感じています。前期の農場実習では、県畜産試験場の酪農・肉牛、養豚、養鶏、飼料環境担当の先生方から豚熱や鳥インフルエンザ等家畜伝染病の予防に対応した最新の衛生対策の実践とともに、家畜飼養管理技術に関する基礎的な実習を受けることができました。

香川農大では家畜を飼っていないので、現在は農大周辺の大規模かつ先進的技術を導入した経営体に出向いて、

農場実習先での集合写真・前列向かって右端

実際の経営を踏まえた家畜飼養管理技術の実習に取組んでいます。この現地実習でも、幅広く各畜種別の前期講義や畜産試験場での基礎的実習が役立ったことは言うまでもありません。

また、養蜂家や畜産の流通部門を担う鶏卵GPセンター、食鳥センター、食肉センター、配合飼料工場等の現地視察を行って、畜産部門の懐の深さを実感することができました。

資格については、今年度に家畜商講習会を受講しました。さらに、令和六年の夏期休暇中には家畜人工授精師養成講習会が開催されます。これは、私が最も取得したい資格なので、夏休みを返上して資格取得に向けてがんばりたいと思っています。

令和六年度は週三回畜産試験場における専攻実習が学生生活のメインとなります。私は、養豚を専攻しようと思っていますが、最終目標である養豚関係の職業に就けるように、残された時間を目一杯頑張って知識や技術をさらに取得したいと思っています。そして、学生自治会活動のスポーツ大会や収穫祭などにも積極的に参加して、楽しい思い出作りもしていくつもりです。

学生自治会での一コマと、農業への思い

愛媛県立農業大学校
総合農学科　二年　農産園芸コース
平松道康

学生自治会の会長に選ばれ、この一年過ごしてきましたが、特に楽しかったのは一大イベントである秋の収穫祭です。自治会ではバザーとイベントをすることになり、バザーは本校産のレモンとキウイフルーツを使ったレモンスカッシュとキウイスカッシュ、それと本校産のキャベツを使ったお好み焼きを販売しました。レモンスカッシュ、キウイスカッシュ、お好み焼きともに材料や調理方法を積極的に提案してくれる人を中心に、自治会のみんなや先生の指導のもと作り上げていきました。その収穫祭までのみんなで準備する過程が楽しかったです。

収穫祭当日は、入場者は先に農産物の購入に行っているのでバザーのお客さんは少なかったけど、次第にお客さんが多くなり、とてもさばききれないほど来て、とても忙しかったですが、お客さんが待っているのを見かねて販売を手伝ってくれた学生もいて助かりました。こんなに客商売が大変だとは思いませんでした。担当の学生もお客さんを楽しませようと、かわいい手書きイラストの看板や女装コスプレやぬいぐるみを準備し、話のネタになるほど話題になりお客さんも喜んでいました。

イベントでは子供向けに輪投げゲームを準備し、本校産の農産物を景品にしました。子供も楽しくやっていてよかったと思います。事前に先生方や学生がポスター、テント設営や農産物等の準備、当日は車やお客さんの誘導、農産物販売をみんなで一緒にして頂きとても充実した収穫祭でした。

さて、ここからは私の農業に対する思いをお伝えしたいと思います。

『土壌』なんと奥が深い世界でしょうか。この土壌により地球に住む全ての生命体がお世話になっており、大型動物から小型動物、微生物まで土壌に依存しています。もちろん人間もです。この土壌の中にも小さな小さな生き物がいます。微生物と土壌動物であり、土壌一㎡の中に微生物と土壌生物が大体一〇kg存在するといわれています。特にたくさんいるのは「森」です。森はなぜ肥料を施肥しないのに生き生きと元気よく成長しているのでしょうか？そうです、大型動物から小型動物、土壌動物や微生物までが豊かに活動して多くの種が共生関係により土壌機能が発揮され、植物が栄養塩類や炭素を吸収し成長しています。この関係を少しでもいいので農業に活かせられたらいいと思います。しかし、農地では土壌生物等を見かけることは少なく寂しい限りです。最近は土から離れ、土に触ることも少なくなっています。

土に触ることで様々な効能があり、一つ目として、精神面で良い影響があるそうです。土の中には数多くのバクテリアが存在して、その中のある種のバクテリアには脳内神経伝達物質の一つであるセロトニンを増やす働きがあるそうです。

二つ目として、アーシングで裸足になり土を踏んだりすることによりパソコンやスマホなどから受ける静電気を除くことができます。三つ目として、外に出て日光を浴びることにより、骨を丈夫にするビタミンDも作られ風邪予防にもなります。また、太陽光にはセロトニンの分泌を助ける作用があり、夜もぐっすり眠れます。

私は日頃から家庭菜園をしており、何を植えようかといつも考え、成長の喜びや収穫の楽しみもありとても面白いと感じています。卒業後は自営就農することにしており、農大で二年間学んだことを生かし、自分の目指す安全・安心な農業に取り組んでいきたいと考えています。そして、これからもこの農業の基本である『土壌』について追及していきたいです。

学生自治会長として
収穫祭であいさつ

夢

愛媛県立農業大学校
総合農学科　二年　果樹コース
内川文愛

私の将来の夢はみかん農家になることだ。小さい頃から今までずっとみかんが一番好きな食べ物で、一年中食べるにはどうしたらよいかと考える毎日を送っていた。中学の頃、家庭科部に所属しており顧問の先生が熱心な方でよく部活動の一環として近所の農家の手伝いでボランティアを行っていた。そして中学三年生。高校選択の際、部活動で農業という新しい選択肢が増え自分が作る側になれば一年中食べられるのではと思い、農芸高校に通うことを決めた。東京の高校のためみかんは栽培していなかったが、農業の基礎的な知識や技術、仲間との協調性などを身に付けることができた。みかんは愛媛という印象が強く、愛媛でみかんを育てたいと強く思うようになり、大学は愛媛県立農業大学校を受験した。この学校に入学して様々な人や農家に出会ってとてもいい経験ができたし、いい出会いが増えて愛媛に来てよかったと思った。初めてみかんについて沢山学んだり体験したりすることができ、新たに農業の面白さや奥深さに気づきさらにみかんが好きになった。そして、友人が持ってきてくれたみかんを毎日のようにたらふく食べることができ幸せだった。

そんな私は来年の春卒業し、大洲市長浜町の農家に就農することが決まった。ここの農家は家族で経営しており、仲睦まじく農業をして、繁忙期だけアルバイトを雇って作業をしている。私も将来は家族でゆっくりと時間が流れるようなほのぼのとした農業をしたいと思っている。確かに、お金を稼がなければこの先経営ができず、農業を続けられず生活もまともにできないかもしれない。だが、お金のことだけ考えていても純粋に楽しみながら農業はできないし、自分も職業として胸を張って仕事はできないと思う。

私はみかんに触れている時間はお金など余計なことは考えず「おいしいみかんを作る」ということを一番に考えたいと思っている。だから、私はこの農家のもとに就農することを決めた。そしてここの農家で二～三年程お世話になり、その後みかんの中でも特に好きな温州みかんの産地として有名な南予で、新しく別の農家のもとで二～三年働き、理想の農家像と温州みかんの栽培技術を学んで身に付けていきたい。

みかんの収穫作業

そのためには、卒業しても出会いや縁を大切にしてこれからももっといろいろな農家とのつながりを広げていきたい。そのつながりの中で一緒にみかんを作ってくれるパートナーと出会い楽しくみかんを作りたい。

最終的にはみかんを作る土地を見つけ貸していただき、自分や家族みんなで少しずつ着実に園地を増やしたり新しい技術を導入したりしながら、農業で生活ができるように努力や工夫をして楽しく農業をしたい。そして私と同じようにみかんが好きになるようなおいしいみかんを作って喜んでもらいたい。私がよぼよぼのおばあちゃんになっても自分の子供や孫だけでなく周りの人たちにもみかんや農業のすばらしさを教えていき、土地を引き継いでみかん農家を続けてほしいと思っている。

世界一のみかんへの道

愛媛県立農業大学校
総合農学科　二年　果樹コース
小立美緒

私が農業に興味を持ち、農業大学校への入学を決意したきっかけは、実家が農家で幼い頃から自然に囲まれた環境で育ち、自然が非常に好きでその中で仕事をしたいと考えたことと、祖父母や両親が柑橘栽培をしている姿を見てきたことです。そして、高校生の頃に祖父母から現在に至るまでの歴史を教えてもらい、耕作放棄地にしてその努力を水の泡にしたくないと純粋に思ったことがきっかけです。学校生活を送る中で、徐々に柑橘の栽培技術や農業に関する知識が身に付き、将来のことを考える機会が増えていきました。

学校生活で大きく学んだことは、継続と計画性の大切さです。継続に関しては、幼い頃から続けてきたことが自分の強みになったり、何気なく続けてきたことが大きくなって返ってきたりする経験を通して大切だと思いました。計画性に関しては、私は行き当たりばったりで、後悔してしまうことが多々あり、このようなことは避けたいので、しっかりと先に計画を立ててから行動することが大切だと思いました。

私は、愛媛県立農業大学校を卒業した後、八幡浜市の真穴地区で柑橘栽培をしている黒田みかん株式会社に就職します。この就職先を選んだ理由は、三つあります。一つ目は、マルチ栽培と点滴灌水という二つの栽培方法を組み合わせた「マルドリ方式（周年マルチ点滴灌水同時施肥法）」が導入されており、より高度な栽培技術を習得できると考えたからです。二つ目は、みかんといえば「真穴みかん」というイメージが強く、自分で栽培した美味し

柿の摘蕾作業

いみかんを満足いくほど食べたいと思ったからです。三つ目は、周りの方々が親切だったからです。黒田さんや、ご家族の皆様、社員の方と初めてお会いした時に優しく接してくださったり、八幡浜市で先進農家体験学習をさせていただいた時に、農家や地域の方々が笑顔で積極的にコミュニケーションをとってくださったりしたことによって、安心して生活ができると確信しました。

そこでしたいことは、自身の柑橘の栽培技術をより向上させることや柑橘関連の人間関係の輪を広げることです。また、有名な「真穴みかん」をたくさんの人に味わっていただくことです。

入学時は大学校卒業後に実家に帰るつもりでいましたが、入学したことをきっかけに、兄が農業に興味を持ち始め、大学卒業後に実家に帰る予定となったため、私は就職することができます。

ここで三年程度経験を積んだ後は、実家に帰り家族と共に柑橘栽培をするか、他の柑橘栽培関連の法人に就職するか、違うことをするか、それは未定です。就職先で経験を積む中で見えてくるものがあると考えています。

十分な技術を習得した暁には、人生のパートナーを見つけ、世界で一番美味しいみかんを栽培し、自分の子供に食べてもらうことが私の夢です。この夢の実現に向けて、地道な努力とチャンスを掴むために自分磨きを頑張ります。

長靴の夢
～農業へルパー制度で次世代型食農教育を～

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　畜産コース
砂田和愛

皆さんは、「長靴の夢」と聞いてどんな夢を想像しますか？私の目指す農業とは地域のみんなが一緒になって楽しめる農業です。多数の人が農地を行き来する以上、絶対に病気を持ち込まないためにピカピカの長靴で皆が安心して農業を楽しめるようにする。それこそが私の長靴の夢です。今日はその夢について語りたいと思います。

まず、入学当初の私には、実家の肉牛農家を継ぐという漠然とした目標しかありませんでした。しかし、先生方のアドバイスを受けて、それがとても難しいということが判明しました。それは、現在では新しく牛舎を建てる場合、半径五百m以内の近隣住民の許可が必要だったのです。

そして、この問題の解決策を探るために夏休みを使って、引退して第三者継承を行う肉牛農家を訪ねてみることにしました。元々存在する牛舎を受け継ぐ形なら近隣住民の許可は要らないからです。しかし、実際に話を伺ってみると、受け継いだ牛舎が「飛び地」になってしまう新たな課題が生じることが分かりました。では、この牛舎を相続する側の農家は一体どうするつもりなのか。疑問に思って聞いてみると、なんと彼は、牛舎内にカメラを設置することで、リモートで牛の監視ができるようにしていたのです。これなら、従業員と連携することで現場の小さな異変に素早く対応することができます。この第三者継承とデジタル技術を活かせば、農業の後継者不足の解消や、デジタル技術を駆使した農業ＤＸの推進にもつながる、まさに次世代の農業です。

こうして農場見学によって明確な目標を手に入れ、まさに順風満帆そのものでした。しかし、夏休みの最後、ショックな出来事が起こりました。我が家で大切に育てた牛が相場よりもはるかに低い価格で買い叩かれていたのです。他の血統の良い牛が四〇万円ほどで落札されていくなかで、自分の牛だけが一〇万円台でいつまで経っても入札されず、隣で見守ることしか出来ない情けない自分がいて、あの時間は永遠にも感じられました。同じような牛でも血統だけでこんなにも残酷に差がつくのか、なぜこうなる前にもっと親と経営方針について話し合わなかったのかと、激しい後悔が沸き上がり、もう一度就農について一から考える必要があると思い直しました。そのため、私は農家訪問を続け、いつしか農場見学を楽しいと感じるようになっていました。

これからの未来、この農業に関わる楽しさを活かした「農業関係人口」が重要になってくると考えています。関係人口とは、観光以上定住未満の距離感で地域に関わってくれる人々のことです。例えば、もし愛媛県が県内外からたくさんの就農者を確保できたとしても、本来他業種や他県で就職するはずだった人材を奪っていることになります。しかし、その人たちの本業を妨げない範囲で農業に関わってもらえれば、全体のリソースを奪い合うことなく、将来その人が転職や定年を機に就農してくれるきっかけになります。農業関係人口を増やして「知る」だけでなく「関わる」次世代型食農教育によっ

草刈作業に従事中

て農業の後継者不足を解消できると考えています。

農業関係人口を増やすために私は今、酪農ヘルパーならぬ「農業ヘルパー」を目指しています。農業ヘルパーであれば、自分の農地の管理にとらわれずに、いろんな農家と交流しながら農業を楽しめます。さらに、この制度を広めることで、どこでも農業に関われる新しい食農教育につながります。農業ヘルパーを通じて知識と人脈を広げ、ゆくゆくは独立就農したいと考えています。その時は夏休みに得たアイデアをもう一度生かし、遠隔地の農家と連携して日本中で農業を営み、あらゆる地域の人に農業に関わってもらうことを目指します。そして、農家の信頼を得るために私は誰よりも長靴をきれいに扱うことを誓います。

私が目指す農業

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　農産園芸コース
徳永琉太

私の将来の夢は、ブドウ農家になることです。私がこの夢を志し始めたのは農業大学校に入学してからです。私は幼いころからブドウを食べることが好きでしたが、最近は味や食感だけではなく、品種によってさまざまに異なる色、実の形や大きさなどの見た目、そして整房などの作業、高い値段で取引されることに魅力を感じるようになりました。

私は将来、農業の「新三K」をコンセプトにした農家になりたいと考えています。これまでに言われてきた農業の三Kというと、「きつい、汚い、危険」という芳しくないものでした。一方で、先程挙げた「新三K」というのは、本校のキャッチフレーズでもある「稼げる、かっこいい、感動を楽しめる」というものです。

先ず最初に、「稼げる」についてお話します。これからの日本の農業で利益を出していくには、次のことが大事だと考えています。

一つ目は、グローバルGAPなどの認証を取得することです。認証を取得することによって、取引先や消費者の直接確認が難しい生産工程の安全性が裏付けられ、信頼確保に繋がります。また、販路拡大にもつながると思います。二つ目は、六次産業化です。生産・加工・流通・販売を一体化させることで、農産物の付加価値を向上させ、利益を生み出すことができます。三つ目は、農産物のブランド化です。同じ果物でも、ブランド化した果物はその価値が上がります。消費者が産品を選ぶ時の判断基準として、「このブランドなら大丈夫」と安心し、信頼できると思ってもらえます。以上の三つのことを同時にこなしていくのは、とても大変で難しいことではあると思います。ですが、それを達成することができれば稼げる農家になれるのではないかと考えます。

落葉果樹の剪定実習作業

次に「かっこいい」についてです。私は農業に対して「ダサい」というイメージを持っている人は、農業のことをよく知らない人だと思っています。私も「農業ってなんだか地味で嫌だな」と思っていた時期がありました。ところが、農業について学んでいくにつれて、その考えは変わっていきました。

特に私が影響を受けたのが「農業DX」です。ロボットやAI、IoTなどのデジタル技術を活用した農業というのは想像もしていませんでした。農業DXによって、農業は大きな変化を遂げてきているということがもっと社会に知られていけば、ネガティブなイメージも減っていくのではないかと考えます。

最後に「感動を楽しめる」についてですが、私は農業をすることの魅力の一つに、自分が作った作物を消費者に食べてもらい、喜んでもらうことがあると思います。農業だけでなく、様々な職業でも言えることですが、やはり大切なことは、仕事をしてやりがいを感じることだと思います。やりがいを感じることは、農業を続けていく上でのモチベーションにもなると思います。

これから日本の人口と同時に、農業人口も減っていくと予想されています。そのため、これからは少人数でも安定して稼げる農業をしていくことが、重要になっていくと考えます。農業DXによって、先進的な技術を有効に活用していくことは、日本の明るい農業の未来につながる重要なことだと思います。

私は将来、新三Kを実践し、農大で学んだ農業DXの知識を生かしたブドウ農家になりたいと思っています。そして、農業って素敵だなと思ってもらえる農家を目指したいです。日本の農業の未来を少しでも明るくすることができれば私は嬉しいです。

私の二年間と培ってきたもの

高知県立農業大学校
園芸学科　二年　野菜専攻
学生自治会長
古田拓己

私が農大に入学した理由は、地元に高軒高ハウスでのパプリカ生産法人ができ、

そこに就職するために、パプリカの知識をつけたいと思ったからです。しかし、農大にある高軒高ハウスはトマトを栽培していたため、通常軒高のハウスでピーマンを栽培することになりました。プロジェクト研究では「ピーマンにおける栽植密度の違いによる収量・品質の比較」という課題を設定しました。その取組の中では、ピーマンについての知識や作業について学ぶことができました。栽培初心者の私は、病害虫を生育初期から最後まで大量発生させてしまいました。害虫が発生している株では、収穫や整枝作業がしづらく、気分もあまり良くありませんでした。また、葉面積指数を考慮した整枝の感覚がよく分からなかったこともあり、切り過ぎたりして全体的に収量が落ちてしまいました。このようなことを経験することで、農家の栽培がどれだけ上手かということを実感することができました。座学や機械実習では、県内の主要な園芸作物や土壌に関すること、耕耘機やユンボなどの機械操作について学ぶことができました。そして、その知識を生かし、資格取得に積極的にチャレンジし、農業技術検定や土壌医などの資格を取得することができました。

オランダ交換留学研修では、初めての海外ということもあり、最初少し緊張していましたが、現地では、ホームステイ先の方達とともに言葉の壁を越えて、交流ができ、農業や文化などについて知ることができました。長時間のフライトで首や腰が痛くなったりしたものの、見るものや体験するものすべてが新鮮で、とても充実した研修になったと感じました。

先進農家等留学研修では、農大で培ってきたものが全て生きていると感じました。農家さんとの日々のコミュニケーション、ピーマンに関する知識、収穫などの作業、研修へ行くたびに学んでおいて良かったと思えることばかりでした。

自治会長も一年間務めましたが、あまりうまく皆を引っ張っていくことができなかったと感じています。私は、中学生の時から何かしらの役職についていましたが、人に指示をして何かをするというよりは、自分が率先して動くというタイプで、農大でも一人で仕事をしてしまうことが多かったように思います。しかし、引っ張っていく人数が多くなりイベントを催すときは人に頼らないといけないということを実感しました。指示をしてもうまく伝わらなかったり、報告、連絡、相談もあまりできていなかったように思います。このような点は反省点ですが、自分の成長につながったと感じることもあります。その一つは、外部講師の授業や研修先での代表挨拶を即興で考えて行うことができるようになったことです。これができるようになったことで、いつ挨拶をふられてもきちんと出来る自信が付きました。

私は、この二年間でたくさんの挑戦をし、経験をして、その中で失敗も多くありました。その中で、先生や友達に頼られるようになり、一つの事が終わっても次から次へと対処しないといけないことが舞い込んできました。しかし、その分、自分の能力を向上させることができ、たくさんの人とつながることができました。農大卒業後は、高知大学農林海洋科学部へ編入する予定です。これまで培ってきたものを活用し、次の学びへ繋げていきたいと考えています。

先進農家留学研修で学んだこと

高知県立農業大学校
園芸学科　二年　野菜専攻
山﨑　竜平

私が研修させていただいたのは、土佐市でピーマンを栽培されているNさんです。栽培品種は，みおぎ，で、台木は青枯病対策として，台助，を使用しています。栽培面積は五十九aの家族経営で、家族四人と従業員六人で栽培されています。定植日は八月十三日で、栽培期間は翌年六月下旬までです。栽植方法は、二条千鳥植えで株間は六十cmでした。天敵には、スワルスキーカブリダニ、クロヒョウタンカスミカメを主に使用していました。加温機は、重油ボイラーとヒートポンプの併用で、温度管理は日の入りから徐々に加温していくオランダ方式の管理で、前夜半は十八℃、後夜半は、朝八時に二十一℃を目指して管理していました。病害虫対策は、定植前にネマキック粒剤を使用してネコブセンチュウを防除していた他、採果ハサミを畝ごとにバーナーで炙り、青枯病などの被害を最小限に抑えるようにしていました。

研修の主な内容は、収穫、側枝の摘心、整枝、残さの片付け、ビニール張り、摘葉、誘引、ボイラーの掃除、ダクトの取り付け、硫黄粉剤の散布、天敵放飼、ミスト装置の配管交換でした。ピーマンの収穫では、三十g果を中心として、それ以下を穫らないように、始めは測りながら収穫しました。数日経つと収穫しながら古い葉を二枚ずつ摘葉していきました。その他にも、できるだけ石実を取りました。理由としては、石実があると他の果実の生長が遅くなるためだそうです。整枝と摘心は、ハウス内の一畝を任され、収穫しながら整枝を行いました。果実の着いていない枝、全体で見て他の生長を邪魔しそうな枝、畝の内側に向けて伸びている枝を優先して剪定しました。切れると思っても枝の先に果実が着いていることもあるので慎重になりすぎて、時間がかかりましたが、整枝に注意を受けることなくできました。厳寒期にそなえて、保温のためハウスのサイドや妻面にビニールを張りました。ビニール張りは、整枝などの時間のあいまを見て行いました。ビニールをスプ

リングで留めたり、伸ばしたり、穴をふさいだりしました。残さ片付けは、一カ所に集めた残さをかごに入れて運び出しました。一つ一つはそう重くはありませんでしたが、かなりの量があり大変でした。摘葉については、収穫時に葉をとらない日は大体、収穫後に下葉を数枚取りました。一回で取りきらない理由は、ピーマンにストレスをかけないようにしているそうで、何日かに分けて少しずつ取りました。誘引作業は、まだ伸びきっていない枝の誘引をしました。花芽を落とさないように注意しながらの作業で気をつかいました。暖房は、ヒートポンプを併用して行っているため、重油ボイラーの掃除は年に一度で良いそうです。重油ボイラーだけで加温をする場合であれば、年に三回は掃除をするそうです。ダクトの取り付けでは、子ダクトの継ぎ手部分を破かないように気を付けながら広げ、隙間のないように針金で縛りました。硫黄粉剤の散布では、通路に粉剤をまく時、できるだけ植物体やダクトにかけないように注意しながら行いました。植物体にかかれば、うどんこ病やハダニに効果がありますが、天敵が寄り付かなくなるそうです。ダクトにかかると、劣化が早まるので、かけないようにしました。ハウスにアザミウマやハダニが出始めていたので、天敵を放飼しました。ミスト装置は、配管が破裂していたので修理の手伝いをしました。ミストは飽差管理や夏場の作業時に使用しているそうです。

今回の研修では、様々な事を学ばせてもらいました。温度管理では、定植してから厳寒期や春先までの管理について、整枝方法では、残す枝と切る枝の基準について、ハウス内設備では、導入する機器の優先順位など、他には病害虫対策や天敵を放飼するタイミング、湿度管理、かん水量の過不足の判断など詳しく挙げればきりがないですが、どの管理や作業にも必要な知識があること、そして私にそれらの知識が足りないことがよくわかりました。研修初日、Nさんに聞かれたことがありました。「農大生として研修するか、将来農業をする研修生として扱って欲しいか」という質問が分岐点だったと思います。選択が違っていたら色んな人に会うことも、研修中や研修後に視察に行かせてもらうことも、気にかけてもらうこともなかったと思います。私としては、最初、少しでも多く学ぶことができればいいという程度でしたが、この四十数日の研修期間で、時間が足りないと実感し、もっと勉強しておけば良かったと思えるほどに得るものが多い研修でした。まだまだ、足りないことが多く、先が不安ですが、この研修で出会った人にも頼りながら、私の目標とする就農に近づけるよう頑張りたいと思います。

私の目指す農業

高知県立農業大学校
園芸学科　一年　花き専攻
岡村　京華

私が目指す農業は、「社会と深く関わり、人を笑顔にすることができる農業」です。

私が農業に関わることになったきっかけは、実家が農業を営んでいたからです。山と川に囲まれ、農業が盛んに行われる地域で育った私は、自然と農業に関わる機会が多くありました。幼い頃から実家の手伝いで、市場に出す農産物の荷づくりや稲刈りの手伝いなどをしていたこともあり、農業に興味を持つようになりました。幼い頃、家を訪問していたJA職員さんのお話を聞く機会があり、そのお話の中で「農業は生活に欠かせないもので、美味しいものや綺麗な花をみたら笑顔になる。そのようなものを作っている農家さんはすごい」というお話を聞きました。そのお話を聞いて、漠然と将来は農業関係の職に就きたいと考えるようになりました。そして私は農業について学ぶため、地元にある高校へ進学しました。高校では、二年次から農業コースが選択できたため、私は農業コースを選択し、二年間農業実習等を行いました。野菜を育てることはもちろん、花の栽培も経験することが出来ました。花の栽培を経験していく中で、野菜とは異なる栽培方法やその時の社会情勢によって値段や需要が左右されていることを知り、花について興味を持ちました。また、授業のカリキュラムで地域の農家さんや農業法人の方にお話を聞く機会があり、担い手不足や耕作放棄地が問題になっていることなど、農業の問題も知りました。そして高校卒業後、高知県立農業大学校に進学しました。なぜ、農業大学校に入学を決めたかというと、高校時代、花の栽培や販売実習を行う中で、花に関係する職に就きたいと考えるようになり、花き科がある本校で、花についてもっと多くの事を学びたいと考えたからです。

農業大学校に入学してから、私が力を入れていることは、大きく分けて二つあります。一つ目は、各種の資格を多く取得する事です。現在までに、フラワー装飾技能検定三級や農業技術検定三級などを取得しました。来年度は、フラワー装飾技能検定二級に挑戦したいと考えています。二つ目は、プロジェクト研究です。私は今、ユリに関してのプロジェクトを行っています。その内容は、「オリエンタル系ユリにおける八重品種の特性把握及び前処理方法の検討」です。近年、八重咲きのユリは人気があり、需要が高くなってきている傾向にあります。その中で、八重咲き品種は、従来のユリと比べ球根代金など費用が高いことや出荷の形式、労力が他のユリと大きく変わります。

これらの知見を得ることが取組の一つ目の理由です。二つ目は、日持ち性の向上がユリの課題として挙げられているからです。そのため、各種の品質保持剤による日持ちの比較を行い、その効果を確認するとともに、課題を明らかにすることを目的としています。このプロジェクト研究を行うことは、将来私が取り組んでいきたい農業の「社会と深く関わり、人を笑顔にすることのできる農業」に繋がっていくと考えています。ユリを栽培し、出荷する際の課題を明確にすることで、生産者のお役にたてて、消費者の方にもたくさんの花を届けることができ、喜んでいただけるのではないかと考えています。そのため、今、行っているプロジェクト研究を成功させることを目標に、農大生活を送っています。また、農業大学校に入学して感じたことは専門的な知識の差です。高校では、農業についての学習をしてきましたが、普通高校だったため、やはり専門的な勉強というと限界がありました。このため、農業系高校出身の人とは、知識の差を感じました。また、農業機械を扱う作業では、力が必要な作業も多くあり、上手く扱えなかったり、仕組みが理解できていないため、スムーズに作業が進まないことに悔しさを感じることも多くありました。そのため、基礎知識や農業機械の使い方等を身に付けるために日々の授業に力を入れています。

私は、卒業後には花に関係する職業に就きたいと考えています。農業大学校では、フラワー装飾技能検定の資格を取得しているので、それを活かしていきたいと思っています。例えば、一年次のインターンシップでお世話になったユリ農家さんのお仕事やJAメモリアルさんの花を生けるお仕事などに現在興味を持っています。私は、花は観賞するなどの単なる「もの」ではなく、心や気持ちを伝えるアイテムであると考えています。例えば、プロポーズや母の日、人生の節目節目に贈る相手に気持ちを伝え、相手を笑顔にすることが出来る力が花にはあると思います。

私は、「社会と深く関わり、人を笑顔にすることのできる農業」を行うことを目標に、残りの農業大学校で学ぶことのできる時間を精一杯取り組んでいきたいです。日頃のプロジェクト研究はもちろん、資格取得にもどんどん挑戦していきたいと考えています。また、実家の農業を積極的に手伝いながら、知識を広げる為に色々な方のお話を聞き参考にしたいと考えています。目標に向けて、精一杯出来ることを頑張りつつ、残りの農業大学校での生活を充実したものにしていきたいと思っています。

私の将来について

高知県立農業大学校
園芸学科　一年　野菜専攻
濱田　慎之介

私は将来、日本の食を支えられるような仕事に就きたいと考えています。そして、里山などで作られなくなった田畑を減らすことが、私の将来の夢です。私がこの将来の夢を目指すきっかけになったのは、祖父母の影響です。私の祖父母は兼業農家で、私も幼い頃から稲の刈り取りや、天日干しなどの作業を手伝っていました。それらの農作業は大変でしたが、祖父母が一年かけて育てた水稲を家族が一丸となって収穫することに喜びを感じていました。また、祖父母が稲作をしていた棚田が一年を通して姿を変えていくのが幼いころからとても好きでした。中学生になってからは、学校行事や部活、コロナ禍などの影響で手伝いに行くことはなくなっていきました。しかし、祖父母が毎年贈ってくれた新米を食べることで、食を支えてくれていることへの大切さや愛情を感じていました。私が高校一年生の時、祖父が亡くなり稲作をやめることになりました。今まで稲作をしていた棚田が耕作放棄地になってしまうことを知って、あの里山の美しい田園風景がなくなってしまうことに寂しさを感じました。また、祖父母の米から市販の米に変わったとき、慣れ親しんだ味から違う味に変わったと感じました。この時私は、跡継ぎのいない農家では、これまで培われた技術を失ってしまうことを痛感しました。そして、私は使われなくなった田畑を少しでも減らし、農家の技術を橋渡しできるような仕事をしたいと考えるようになりました。そこから私は、より実践的な農業を学びたいと考え、高知県立農業大学校へ進学しました。

農業大学校では、自身が希望する作物を一年かけて研究をしながら栽培をすることができ、農業に対しての知識や経験を養うことができます。また、農業技術検定やフォークリフト運転技能研修など、農業に関する多くの資格に挑戦することができます。しかし、農業大学校に入学してからは、大きな課題に直面しました。まず、私は普通校からの進学ですが、同級生は農業高校出身者や実家が農家を営んでいる人が多いという状況でした。そのため、農業に対する知識や経験に大きな差があり、同級生との知識の差に苦しみました。実習中に農業用語を言われても、すぐに理解ができずに、対応できない時がありました。そして、授業についていけるかということも心配でした。しかし、授業の内容がとても興味深く、また実際に体験する授業内容が多かったこともあり、これらの心配は徐々に少なくなりました。また、体力面でも不安がありました。私は学生時代の六

年間文化部であったこともあり、農作業などの力仕事についていけない時がありました。午前中に実習があった日の午後の授業では、疲労の影響でついていくのが大変でした。これらのことから、私は人一倍農業に関する知識を深め、経験を積む必要があると思いました。そこで、座学では、分からない事は積極的に質問したり、調べるようにしました。それに加えて、農作業についていくだけの体力を身に付けるため、登下校を自転車通学にするなど、日頃からの運動を心掛けるようにしました。

私は今、プロジェクト研究でイチゴを栽培しています。しかし、炭そ病が発生しイチゴの株が大きな被害を受けました。その病気について調べてみると、炭そ病は防除が非常に難しい病害であることが分かりました。こういった経験をすることで農業の難しさや厳しさを身をもって知りました。改めて食を支える大変さを痛感しました。

農業大学校を卒業した後は、高知大学への編入を考えています。なぜなら、大学では、農業について、より専門的なことを学ぶことができ、農業大学校で出来なかった研究などを行いたいと考えたからです。そして、農業に関する知識や経験をより多く積み、将来に向けて、多くの選択肢を持ちたいと思ったからです。また、農業に関する多くの人達と様々な交流を図ることができるのではないか、そして、多くの人脈を広げることで、お互いが困ったときに助け合える関係を作ることができるのではないかと考えています。将来は、農業関係の仕事に就き、社会に貢献したいと考えています。また、仕事を行いながら、祖父母が残してくれた田畑を再生させ、祖父母に負けない美味しい米を作りたいと思います。今、自分がやらなければならないことは、農業における生産や流通についての知識や経験を積むこと、そして多くの農業関係者と交流を深めることです。様々な経験を糧にして、将来の夢を実現させていきたいと考えています。

農業大学校に入学して

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
農業生産技術コース　二年
熊村雅樹

私は、今、農業大学校（以下、「徳島農大」という。）の二年次生として、農業の知識を深めています。まず、私が農業に興味をもったきっかけは、大きく二つあります。一つ目は、幼い頃から実家で両親や祖父母が一生懸命に農作業をしている姿を見て、かっこいいという思いがあったからです。自分達の食卓に並ぶ食べ物を栽培しているといった所が日本人の豊かな食生活に貢献できるという点から農業に興味が沸きました。二つ目は、地域の農家さんの話や学校の授業で、近年、農業の担い手が減少しつつあることを知り、少しでも食料自給率の向上に貢献すべく、農業に従事する気持ちが高まりました。農業は、最近の若者には嫌われる傾向ですが少しでも農業に興味を持ってもらいたいと私は考えています。

徳島農大では、「そらそうじゃ」という学生が経営する模擬会社があり、私は品質農場管理部長を努めています。そこでは、学生がコース実習で栽培した青果物や加工品の販売を行い、農業経営者として必要な消費者ニーズの把握やビジネス感覚を学んでいます。この活動を通して、農作物の栽培者（生産者）は、購入していただけるお客様（消費者）に安全・安心な農作物を供給することが基本であると同時に、農業は食べ物を扱うといった観点から気を付けておくべき点が多いと再認識しました。

また、県内の先進的な取り組みを視察する校外授業（農業巡見）では、世界農業遺産である「にし阿波傾斜地農耕システム」を実践している方から、「修学旅行や家族旅行で農家民宿を利用し、田舎生活や農業体験を通して地域の取り組みを知ってもらい、徳島県に足を運んでもらうことが出来る」と聞き、私は傾斜地で農業を頑張っている人もいるのだから平地で作業している私たちもさらに頑張らねばと強い思いを持ちました。

販売面では、JA東とくしまの産直市「あいさい広場」を視察しました。そらそうじゃ部長として、販売手法や陳列方法など知ることが出来ました。それによって栽培面だけでなく、販売面を見学したことで違った目線から農業を見ることが出来たと思っています。この視察で、①農家さんが出荷してきた野菜を販売する、②農地を貸して家庭菜園を行っている、③料理教室を開き野菜料理を研究している、④規格外の野菜等はあいさい広場内の食堂で利用するなど、様々な活動をしており、とても活気にあふれていると感じました。

株式会社中四国クボタ高松事業所での農業機械研修では、様々な農業機械の紹介やドローンやラジコン草刈機などのスマート農機の実演に加え、トラクターと直進キープ田植機の体感操作をしました。トラクターでは、設定すると自動で走り出した場所まで戻ってくる機能を体験し、実家のトラクター

校外研修

購入時の参考にしたいと考えています。

最後に私は、農業大学校に入学して良かったと思っています。知識面では、①仲間との協力作業、②肥料、農薬の計算方法、③パソコンの資格取得など、多くの知識を得ることができました。技術面では、①多品目の野菜栽培、②大型特殊自動車（農耕車限定）やフォークリフトの運転免許、③ドローン操縦の講習を終了しました。将来は実家を継ぎ、経営を拡大するとともに、地域農業の担い手として農業大学校で学んだことを支えとして頑張ろうと思っています。

「私の夢」

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
6次産業ビジネスコース　二年
西岡美優

祖父母は佐那河内村という小さな村で兼業農家をしています。小規模でありながらも、米、菜の花、ミカン、地域特産の大和柿、すだちなどの四季の様々な作物を生産しています。私は幼いころから祖父母について収穫や出荷の手伝いをすることが大好きでした。

その経験から将来は、祖父母の農業をサポートしながら、農業で地域に貢献している農業関連企業に就職したいと考え、農業大学校への入学を決意しました。

入学当初は野菜や作物、花き、畜産など農業全般について学習します。私は高校が普通科出身で、農業の基礎知識がなく、不安で一杯でした。しかし、先生やクラスメイトが丁寧にサポートをしてくれたため、次第に出来ることが増えていきました。今では新しい挑戦でも楽しさを感じられるまでになりました。

二年生になってからは本格的にプロジェクト研究が始まり、現在「放任茶園の再生と和紅茶の需要拡大」について取り組んでいます。

はじめは紅茶が好きだからという理由で取り組んだプロジェクトでしたが、茶園管理の施肥や収穫での手摘作業、加工工程の手揉み等の製茶作業を繰り返していく中で、和紅茶の良さをもっと多くの人に知ってもらいたいと心から思うようになりました。

まずは、和紅茶の知名度を上げるため、徳島県内の有名な菓子会社とともに「とくしまマルシェ」に出店し、和紅茶の試飲をしながら販売を行いました。和紅茶が初めてという消費者が大半でしたが、試飲を通して魅力を伝えたところ、「香りがよく飲みやすい。」「おいしい。」と多くの方に購入いただきました。

また、年に一度の農大祭では、和紅茶を加工品にすることで、より多くの消費者に手に取ってもらいやすいのではないかと考えました。試行錯誤しながら和紅茶パウンドケーキのレシピを考案し、商品化しました。農大祭当日、用意していたパウンドケーキは午前中で完売し、消費者からの反応もよく大好評でした。このことから嗜好性のある和紅茶ですが、加工品にすることでの需要拡大の可能性も感じることが出来ました。

一方で、放任茶園の再生については二年程度の取組みでは、一度手放された茶園を元通りにすることの難しさを実感し、今ある農地を守っていくことの重要性を再認識しました。

卒業後は、憧れであった地域の出荷できない柑橘等を買い取り、付加価値を付けて販売することで地域経済の活性化に取り組んでいる農業関連企業に就職します。そして、就職を機に、実家を出て祖父母と暮らし、農作業をサポートしながら技術を磨き、将来は祖父母の畑を継ぎ農地を守っていくことが、私の夢です。

「とくしまマルシェ」での和紅茶等の販売

農業と向き合ってわかったこと

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
6次産業ビジネスコース　一年
勇凜佳

今の私がいるのは、これまで私のことを支えてくださった人たちがいるからです。私は、その人たちに対して、憧れと恩返しをしたいという気持ちを抱いています。その思いから、自分も誰かを支えられるような存在になりたいという漠然とした思いを持って生きてきました。

そのようななか、農家を営む祖父母の手伝いをしていたときに、自然と触れ合える環境に心を惹かれ、農業に興味を持つようになりました。農業は、私たち人間が生きていくのに必要不可欠である「食」を生み出す産業です。私はこの、農業そして「食」に関する仕事をすることで誰かを支えることができるのではないかと考え、農業を基礎から学び農業業界について詳しく知ろうと思い、農業大学校へ進学しました。

日々の学校生活は、農業に関してほとんど知識と経験のない私にとっては学ぶことが多く、とても刺激的です。例えば、農業は常に省力化や品質向上を追求し続けています。若者の農業従

事者が減少し高齢化が進行している現在、スマート農業などでいかに省力・高品質な生産ができるかが求められています。同様に、他県との競合を減らすために品種改良を行い高品質化を図るという戦略もあります。さらに、農業は自然を相手にする仕事のため、天候などに左右されやすく、必ずうまくいくという保障はありません。地球温暖化により気候変動は激しく、自然環境は変化しています。そのため、長年培ってきた技術だけでは通用しません。新しい技術を確立させて収量を安定化させる必要があります。以上のことから、農業は、常に、いつまでも追究し続けなければならないことがわかります。つまり、農業に終わりはないのです。

また、実習を通して感じたことは、農業は重労働であり、一人では困難だということです。農業で生計を立てていけるほどの規模を一人で管理するのは、心身の負担が大きすぎます。私が実習をこなせているのも、仲間の協力があってこそですから、コミュニケーションの大切さも実感しています。日頃から積極的にコミュニケーションをとって良い関係を築いておくことが、前向きな気持ちで作業ができたり、作業の効率化に繋がったりするのではないかと考えています。

他にも、農業は長期的であり、結果がすぐには出ません。入学してすぐに、スダチの苗を植えたのですが、私たちが卒業するまでに収穫することはできないとのことでした。「桃栗三年柿八年」ということわざがあるように、特に果樹は、出荷して、収益が得られるようになるまでには長い年月がかかります。加えて、試験を行った場合、結果がわかるまでに長期を要するうえに、もう一度試験を行う際には、適期が訪れるまで待たなければならず、長時間を費やすことになります。

このように、農業には様々な課題があります。私はこの課題に取り組み、少しでも解決に導けたなら、私の目標である「誰かを支えられる人になる」という目標が達成されます。そこで、私が特に問題だと捉えているのは、青果物の需要が減り、消費量も減少していることです。農業の実情を知り、今後農業に携わる身として、この問題解決の糸口を見出す必要があると考えました。そこで着目したのがSNSです。現在、若者を中心に発達しているSNSの発信効果は非常に大きなものです。

校外研修

青果出荷できないものを写真映えするものに加工し、SNSに投稿すれば、多くの人の目に留まり、興味を惹きつけることができます。そこから商品そのものの魅力を伝えて消費者に知ってもらうことにより、商品への需要が高まるのではないかと考えています。そのうえ、本来販売することのできないものを利用しているため、新たな商品価値を生み出すことにもなります。実際に、写真映えをテーマに桃のボトルスイーツを開発し、農大祭で販売しました。写真映えを意識しているため、若者をターゲットにしていましたが、見た目のかわいらしさ、美しさから、高齢者の方々にもたくさん購入していただき、完売しました。ここで気付いたことは、写真映えを意識すれば、見た目で需要を増やすことができるということです。写真映えは、全世代の方々に通用するものでもあるということが確認できました。今後は、写真映えする加工品を思いつく限り開発したいと思っています。そして、SNSに専用アカウントを作成し、投稿したいと思います。そこから、どのような反応があるかを確認する予定です。また、観光農園をSNSに投稿すれば、集客も見込めます。観光農園は、来園者に収穫などの農業体験をしてもらうため、農作物だけでなく、農業自体にも興味を引き寄せることができます。そこから、農業をやってみたいと思う人が現れる可能性は十分あると思われます。要するに、集客が多ければ多いほど、農業従事者の確保が期待できるということです。以上から、私は、SNSの活用こそが農作物の需要低迷や農業従事者の減少といった課題解決の糸口になるのではないかと考えています。

農業は、あまたの課題を抱えています。しかし、逆を言えば、それだけのびしろがあるということです。私は、農業に秘められた可能性をいかに引き出せるかが肝要であると感じました。そのため、今は農業大学校で多くを学び、吸収したいと思っています。そして、最終的には農業を通して誰かを支えられるような存在になり、社会に貢献できる人間になりたいです。

六次産業と農業大学校に必要な広報戦略

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
6次産業ビジネスコース　一年
小宮山　晃　史

私はこの夏参加したインターンシップや法人農家見学等で六次産業化における広報の価値の大きさ、その認識を改めなければならないと感じました。法人として一次産業から六次産業に転じて事業拡大するのであれば、まず注力して取り組むべきは自社商品を直接販売する顧客の獲得。スムーズな流通と地

元での広報ができる販売拠点の確保。これら三次産業に力を注ぐことは、その先話題性が継続するか否かに大きく影響します。

直接販売する顧客を獲得することで、自社が確立されたマーケティング戦略を持つことができたという結果を得、自社製品の社会的価値の現在地を知ることができます。これらは生産量の拡大や新商品の開発が進む度、売れる販売戦略を作る上で大きな足がかりになります。実際に多くの企業がネット販売を取り入れ、顧客を獲得しています。しかしこういったインターネットを用いた戦略には、知名度の拡大という部分で大きな落とし穴があるのではないか、と私は感じています。

現状、農村地と呼ばれている地域は少子高齢化と若年層の都市への流出に大きな影響を受け、人口が減少しています。そのため、広報を行う場所を農村地の中で留めている場合と外でも行っている場合とでは、知ってもらう機会の母数に大きく差が出ます。その点、ネット販売はどこにいても多くの人の目に触れてもらう可能性を簡単に高めることができるでしょう。しかし、現在の大量に情報が溢れているネット社会では、インフルエンサーなどが投稿したものに消費は大きく振り回されています。これにより、企業の売り上げも予測できない大きな波に翻弄されてしまいます。これは流行が去った後の消費の継続性が全くの未知である危険性を孕んでいます。そこで、私から提案したいのは、農村地から最も近い市街地に自社製品の販売拠点を設置することです。具体的には農村地近郊の市街地で、地元の味を掘り起すあるいは生み出すことを目的とした、試食販売専門の商店街に近い形の市場を設置します。「地域の味」の地域の幅を広げることこそ長く継がれていく六次産業の第一歩だと私は考えています。地域で作られていることを知っている人の幅を増やすことができれば、同様にそれを守ろうとする人の幅も増えるのではないでしょうか。

校外研修

次に全国にある農業大学校、その知名度に関して私なりに変革を起こせるのではないかと思っていることです。そもそも農業を実践的に学ぶことができる環境や、大学校と大学の農学部との違いを中学生や高校生が知る機会自体とても少ないのではないでしょうか。大学校という実践的な教育機関があることだけでなく、その教育環境もそれぞれに特色があること。他にも農業という職の実態を、簡単に掴むことができる情報や調べようと思うきっかけが日常生活の身近には出回っていないのではないでしょうか。私には印象に残る農業関連の広報はありませんでした。そこで、全国に四十七校もある農業大学校の協議会としての協力関係を活用し、互いに学校のPRをテレビCMやインターネット上の広告として公開する活動を提案したいと思います。今農業を支えようとしている私たちこそ、農業という職そのものを深く知ってもらうことを軽視せず、むしろ注意深く力を注ぐべきなのではないでしょうか。まず、各農業大学校で十五秒ほどの短い動画を撮影します。次に集まった動画を用いた広報活動を大きな団体として、農業大学校協議会が周期的に実施していく。まだここまでしか私なりに考えることができていません。しかし、実現すればこの活動を通して、日常的に農業に関心を持つ機会を増やし、実践的な農業分野の研究や未来の農業を担おうとする若者の層を増やす活動になると考えています。

インターネットは視覚を用いて多くの人に情報を届ける手段として非常に優れており、正しく使うことで大きな影響力を発揮できるでしょう。しかし、農業から始まる食という実体験の満足感で他社と競いながら持続的に顧客を獲得していくことにおいては、直接、顧客と交わり試食や商品説明などを通して感動を覚えてもらうことを軽視してはいけないと私は考えます。なぜなら、私が将来、農業に関する企業で勤めたいと思えた理由こそ、作り手の食への思い、食材を加工し味わう楽しさ、提供する緊張感や緊張を表に出さない丁寧さに魅せられたからです。

First of all, I'd like to thank you for giving me the chance to write this. Now I'm looking back these three years, which are my first three years at Nodai, feeling happy to have a lot of experiences in agriculture as well as to work with many people.　You are also having invaluable experiences in Nodai and have infinite possibilities in the future.　I expect you to study hard and do your best in anything.　I'm sure you will show an outstanding performance.　Lastly, I'll send you this phrase, "To see the world, things dangerous to come to, to see behind the walls, to draw closer, to find each other and to feel.　That is the purpose of life". (Cited from : the film "the Secret Life of Walter Mitty")

Y. Saito from Tokushima Nodai